

連続コラム

— 光秀の源流を探る —

第3回 土岐明智氏と室町幕府

明智氏初代頼重は、土岐宗家の下に団結した土岐桔梗一揆の一翼を担い、足利尊氏からも一目置かれる存在になりました。頼重は幼い息子を残して亡くなるのですが、後を託された弟頼高が南北朝の争乱で大いに活躍、頼高の下で明智氏は勢力を拡大していききました。しかし、康応元年（1338）に転機が訪れます。いわゆる土岐康行の乱です。団結を誇った土岐桔梗一揆は瓦解、土岐一族が相争う状況となったのです。明智氏も例外ではなく、頼高は宗家の土岐康行に味方して幕府と敵対、頼重の子頼篤は幕府に味方しました。この乱を契機に、頼篤は土岐宗家より独立、室町將軍の直臣となりました。

將軍直臣として頼篤の子頼秋の時は外様に編成されていましたが、頼秋の弟頼俊の時に奉公衆へ転じます。奉公衆は、將軍の軍事・政治・経済的支柱であり、在京して將軍に仕えた側近でした。そのため、当

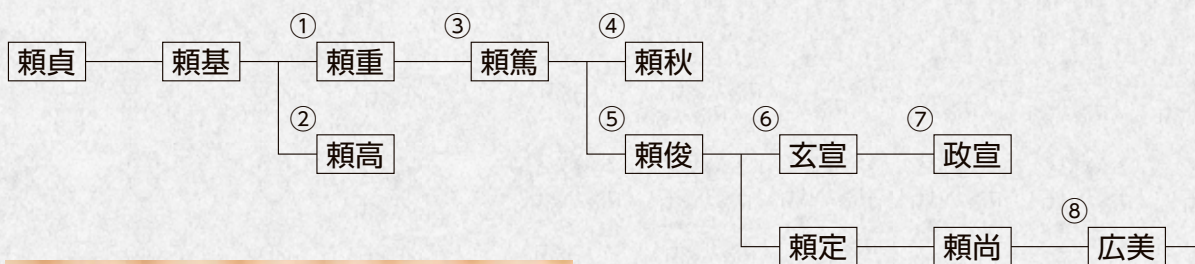
主は京都に住み、領地は一族などを代官として統治することになりました。

奉公衆となった明智氏は、文化面でも活躍しています。頼俊の子玄宣げんせん、その子政宣まさのぶは名高い連歌師でした。特に玄宣は、当時の連歌界の宗匠である宗祇から後継者に指名されるほどの人物でした。

連歌界では成功を収めた玄宣・政宣父子ですが、所領統治には失敗します。世はまさに戦国時代の幕開け、妻木郷の統治を任せていた弟頼定とその子頼尚に妻木郷を奪われてしまうのです。頼定父子は幕府からの圧力ものはねのけ、実力で妻木郷の領主となっていききました。

やがて、宗家の政宣は没落し、頼尚の子広美が当主として幕府から認められ、奉公衆に列しました。しかし、在京して將軍に近侍することはもはやなく、有名無実化した幕府から離れ、戦国乱世を自力で乗り切る道を広美は選ぶのでした。

【土岐明智氏略系図】



「室町幕府奉公人連署奉書」 明応4（1495）年
玄宣と頼定の所領争いの裁定書
（土岐家文書：群馬県立歴史博物館寄託）

9月13日（日）まで会期延長 土岐市美濃陶磁歴史館
特別展 「～光秀の源流～土岐明智氏と妻木氏」